

# 友人関係期待と現実の友人

梅 本 信 章

## (1) 問題

青年期は孤立感が強まるとともに、誰かに自分を理解してほしい、自分のことを知ってほしいという気持が強まる時期でもある。そして、他者との間に親密で有意義な関係を形成することが青年期に果たすべき重要な課題の一つに数えられており、青年期は友人関係についての学習の臨界期であるとされる (LaGaipa, 1979)。青年の発達にとって、友人関係がどのような意義、ないし影響を持っているかについては、従来から多くの研究者によって検討されている。Douvan と Adelson (1966) は、友達が青年のモデル、自分自身を映し出す鏡、補助者、あるいは青年が魅力を感じてはいても、自分で実際に体験することには躊躇するようなことを代理的に体験するテスターなどとして機能していると指摘している。また Ausbel (1954) は内在的 Self-Esteem の獲得、新しい準拠枠の獲得など友人集団の 8 つの機能を挙げている。安藤 (1966) も同一被験者の中学 1 年時と高校 3 年時の準拠集団について調査し、いずれの時期においても準拠集団としては親が最も高い値を示しているものの、中学 1 年から高校 3 年にかけて減少傾向にあること、それに対して親友の値が急激な増加を示していることを見いだしている。そして「一般的に青年前期においては、意志決定や社会的態度の準拠枠としては家族集団が用いられる傾向が著しいが、青年中期になると、その傾向は相対的に弱まり、学校生活並びにその周辺に生じるインフォーマルな一次集団が用いられる」と指摘している。

青年自身が友人関係に多くの情熱を注ぎ、他の対人関係よりも重要なものと認識し、深く親密な関係を結ぶことを望んでいることを示す資料も数多い。少し古くなるが、高校生を対象に

した調査では、過半数以上の者が「友情を結ぶということは人生において最大の喜びの一つである」、「友情をのぞいてしまったら、自分の生活は味気ないものになってしまう」と答えている (西平 1965) し、高校生活への期待として友達とのふれ合いを挙げている (中野目 1971)。

このように、青年期の友人関係は青年の準拠枠や依りどころとなり、精神的安定を与え、さらには人格発達にも大きな影響を持つものである。青年自身も多大の期待を抱いているものである。そうした点から、他の対人関係と異なった意味があるとされることが多い。

それに対して、最近の青年の友人関係について、以前と比較すると希薄で表面的であると言われたり、友人関係に余り深入りしない傾向が広がっている等と指摘されている。小此木 (1984) は現代青年の特徴的心理傾向として、表面上は素直で調子よく、人当たりがよいが、人と深く関わることによって自分を失う不安が強いため、強い連帯感を持ったり、深い友情と強い絆を持つことができないと述べている。確かに、ある調査によれば、友人関係において、青年達は意見の対立しそうな話題や人生如何に生きるべきかなどの難しい話を避け、「なるべく本音の話をしないようにしている」。さらに「なるべく相手の意見に反対しないし、自分の考え方に反対されるのもいや」で「相手のプライドも傷つけないし、自分のプライドも傷つけられたくない」し、「相手のプライバシーにも深入りしないし、自分も深入りされたくない」と思っているものが多数を占めている (NHK 世論調査部 1986)。こうしたことの反面、親友のいない人は 1970 年に 24.3% であったのが、1980 年には 6.6% に減少している (総理府青少年対策本部 1981)。同様に、最近の調査では「親友と言える

人」が一人もないものは3.0%に過ぎない(総務庁青少年対策本部 1986)。即ち、最近は大部分の青年が親しい友人を持っているものの、関係は希薄で表面的なレベルにとどまっているということになる。これは前述した友人関係像とはかなり異なるものである。

こうしたことから、一つに青年が友人と判断する基準や友人・友人関係に対して持っている期待・願望が変化しているということが推測できる。いま一つとしては、以前に比べて友人関係が実際に表面的で希薄なものになっているとしても、内心には以前と同様の友人・友人関係への期待・願望、友人としての基準を持っているということも考えられる。これらの点については、直接的に比較できる資料が必ずしも多くないことから、今後多面的に検討を加えていくことが必要である。本研究では、これまでの研究や文献に表された児童・青年の友人・友人関係に対する期待・願望等を参考にして、友人・友人関係への期待に関する質問項目を選択し、それに基づいて、現代青年の期待・願望を調査・把握することが、目的の一つである。

友人・友人関係の定義や期待については、友人関係概念 (Conceptions of Friendship: e.g., Furman and Bieman 1984; 平良 1987) とか友人関係期待 (Friendship Expectation: e.g., Bigelow 1977) という概念で研究されている。Bigelow (1977) は友人関係期待を、親友が備えているべき重要な特徴として人が挙げている信念、態度、価値感と定義しているが、この二つの概念は意味的にはかなり重複しているといえる。本研究では、友人関係期待を「個人が考えている望ましい友人像及び友人関係像」と定義する。友人関係の形成の理由や「望ましい友人とは」といったことに関連した研究でしばしば指摘されることは、形成の理由、友人の定義ないし友人への期待が年齢とともに変化するということである。児童期の初期には表面的であったものが、長ずるにつれて、内面的・心理的なものが重要視されてくる。友人選択の理由を長年にわたって調査した田中(1975)によれば、相互的接近(住所が近い、席や列順が近いなど)は

小学校の低学年では最も多いが、その後大幅に減少する。それに対して、尊敬・共鳴(相手の長所への尊敬、性格や趣味、希望や意見・思想の一致)は年齢とともに増加し、中学生以降は最も多くなる。別な研究でも、児童期前期では、親切で思いやりがあり、一緒に時間を過ごすことの多い遊び相手として友達を見ているのに対して、青年期では、受容、忠誠、親密性、共通の興味などが重要視されている (Bigelow 1977; Bigelow and LaGaipa 1980)。Sharabany 他 (1981) も、必要なときには友達の援助を当てにできる、いつも一緒にいる、友達が悪口を言われたときは弁護するなど前青年期の時から安定して認められる一方、友達には何でも話せる、話してくれなくても友達が感じていることが分かるといったことは年齢と共に増加していることを示している。また、内面的・性格的な側面への言及が増加するだけでなく、友人への期待が年齢とともに多様化することを示唆する研究もある (Reisman and Shorr 1978; 楠見 1986)。

宮川 (1966) は、タキストスコープを利用して、青年の関心と認知の関係について検討し、進学希望者の多い高校では「しんがく」、「がくれき」、「せんせい」と言った単語の認知閾が低いのにに対して、就職希望者が多い高校では「れんあい」、「こいびと」、「けっこん」、「すぽ一つ」等の認知閾が低いことを明らかにしている。このことは青年の置かれている社会的・心理的状況が青年の関心や認知に影響していることを示している。同じ様なことが友人関係期待についても言えると考えられる。即ち、ある人が置かれている状況がその人特有な友人関係期待と深く関わっていると考えられるのである。一般に青年期は児童期から成人期への移行期であり、顕著な性的成熟や社会的不安定さから不安と動揺の激しい時期とされている。また、主要な心理・社会的発達課題として自我同一性の確立 (Erikson 1973) が挙げられている時期である。こうした青年期の心理・社会的な事情は青年の友人関係期待に強い関連性を持っているものと推測できる。加えて、自己及び自己を巡る状況を論

理的、抽象的に取り扱うことが可能になることも青年期的変化に関係し、従って友人関係期待にも関連していると思われる。Piaget (1969) は、青年期の情意面や社会面の飛躍的發展のためには「思考の変換が生じて、もろもろの仮説の処理や具体的かつ現実的な確認とは切り離されたもろもろの命題による推理が可能になることが先行必要条件である」としている。Bigelow と LaGaipa (1980) は友人関係期待も認知能力の発達に対応して変化すると述べている。青年期には認知能力の発達を背景にして、自己を客体として外から見つめることが可能になり、自己への関心が高まってくる。自分の性格、価値観、あるいは将来などに思いを巡らせ、自己の何たるかを把握しようとする。それとともに、自分の考え、見方、判断が妥当なものかどうか、自分が他者の目にはどの様に映っているのか、他の人はどの様に考え、感じているのかなども関心の的になると思われる。つまり自己への関心の深化が他者への関心の深まりを招くのである。その一方で、自分を知ってほしい、理解してほしいという気持も高まり、その相手としての友人を求める。加藤 (1977) は中・高・大学生、男女ともに友人に対して最も自己開放的であることを明らかにしている。この様なことから考えると、青年は友人に対して、自分をよく理解してくれる、忠告してくれる、自分についての意見・感想を述べてくれる、何でも安心して話せるという期待を持つのではないかと推測できる。何でも話せるためには、秘密を厳守するという信頼と忠誠が求められよう。依田 (1963) は、性的成熟にともなう不安感、過渡期的な社会的地位の不安定といったことから、お互いの問題を理解し、お互いに話し合い、同情し、勇気づけてくれる友人、自分の価値を認めてくれる友人を求めていると述べている。加藤 (1964) も「心を打ち明けて喜びや悩みを共に分かちあうことのできる友人、時には慰め合い、時には批判し合いながら、共通の目標に向かって歩むことのできる友人を渴望する」としている。また、吉田他 (1978) は高校生において友人が持つ意味を分類して、自我支柱の意味（自分の存

在価値を再確認させてくれる。自分の心の支えになってくれる）、価値・態度の教育的意味（人生観や恋愛観、その他諸々の自分と違った意見が聞ける）、新しい自己知覚の促進的意味（自分の悪いところに気付かせてくれる。自分を映し出してくれる鏡）の三つの意味を見いだしている。梅本 (1977, 1978) は中学生と高校生を対象に、望ましい友人としては何を期待するかを「(自分が) ……できる人」、「(自分に) ……してくれる人」という点から調査している。それによれば、激励、相談相手、喜怒哀楽の共有（嬉しいことや悲しいことがあったときに、一緒になって喜んだり悲しんだりしてくれる人など）というような情緒的支持への期待や性格や行動について忠告したり、意見・感想を聞かせてくれるという期待は中学・高校生で共通している。また一緒に話をしたり、スポーツをするといった楽しさ・娯楽への期待は相対的に中学生で高い値を示し、高校生ではこれからの生き方や人生観についての話し合いができるといった期待が大きな比重を占めている。以上のことから、相談相手になってくれる、話を聞いてくれる、秘密を守る、何でも話せる、自分の価値を評価してくれる、共鳴・共感し合える、注意・忠告してくれる、共に喜び、共に悲しんでくれる等が青年期における主要な友人関係期待になっていると思われる。

ところで、友人への期待は理想的なものであるもので、現実の友人関係においてそれが必ずしも満たされているとは限らない。Argyle (1972) はある人が他の人の要求をどの程度満たすかということが交友関係の規定因子の一つであると指摘している。もっと限定して言えば、友人関係の維持・継続を規定する要因の一つと言えよう。もしある人が持つ期待と現在つきあっている友人とのギャップが大きければ、その関係に不満を持ち、その人との友人関係を解消して、別な人との新たな友人関係の形成へと向かうであろう。但し現在の友人に不満があっても、他に変わるべき適当な人がいなければ、その関係は維持され続けることになると思われる (Thibout and Kelley 1959)。従って、よしんば

不満があったとしても、現在親しくしている友人とそうでない人とを比較した場合、期待の充足度は友人の方が大きいものと予想できる。本研究の第二の目的は現在親しくしている友人とそうでない人に対する青年の評価と青年が持つ友人関係期待との関係について検討することである。なお、男子よりも女子は友人関係における信頼と忠誠を重視し、友人に依存的で友人関係を話題にする傾向があり (Douvan and Adelson 1966), 青年期のどの段階においても女子の方が自己開放的である (加藤 1977) など、友人関係においては性差がかなり認められるので、今回は女子青年のみを被験者とした。

## (2) 方法

\* 被験者: 被験者は短期大学1年生の女子学生56名であり、年齢範囲は18-19歳である。

\* 手続き: 質問紙法による調査であり、調査は2回にわたって実施された。1回目の調査では、被験者は30項目の友人関係期待(内容については表・1を参照)のそれぞれについて、「最も望ましい」から「最も望ましくない」の7段階に評定するように教示された。評定にあたっては、一番望ましい項目と一番望ましくない項目を1個ずつ、二番目に望ましい項目と二番目に望ましくない項目を3個ずつ、三番目に望ましい項目と三番目に望ましくない項目を6個ずつ選択するように指示された。残りの10項目は中間項目として取り扱われた。次に、「6人で一つの班を作り、班ごとにどこかへ研修旅行に行くと仮定した場合、あなたが同じ班になりたいと思う人」を同じクラスの人の中から5人選ぶように求められた。

2回目の調査では、1回目のソシオメトリックテストで被験者が最初に名前を書いた人(以後、これを「友人」とする)と、被験者が名前を挙げた5人以外の同級生の中から実験者がランダムに選択した人(以後、これを「非友人」とする)の2人について、先の30項目の友人関係期待にどの程度当てはまるかを、被験者は7段階(「非常に当てはまる」-「全然当てはまらない」)に評定した。それとともに「友人」並びに「非

友人」との親交度についても7段階(「非常に親しい」-「全然親しくない」)に評定した。

\* 調査年月日:

第1回調査……1987年 7月

第2回調査……1987年 9月

\* 質問項目の選択: 質問項目は、基本的には梅本(1977)に基づき、「問題」でレビューした諸期待を参考にして選択・作成した。

## (3) 結果と考察

### 友人関係期待について

第1回調査における「友人への期待」についての回答は、一番望ましいとされた項目を7点、二番目に望ましいとされた項目を6点、以下5点(三番目に望ましい項目)、4点(中間項目)、3点(三番目に望ましくない項目)、2点(二番目に望ましくない項目)、1点(一番望ましくない項目)と得点化して処理した。表・1には、30項目のそれぞれの平均と標準偏差が示してある。相対的に期待が高いと考えられるもの(平均4.5以上)は「何か困ったことや悩み事がある時に、あなたの相談相手になってくれる人」、「これからの生き方や人生観などについて、真面目にあなたの話し相手になってくれる人」、「一緒にいる時、あなたがあまり気を使わなくてもすむ人」、「あなたの性格や考え方を正しく理解してくれる人」、「嬉しい時や悲しい時に、一緒になって喜んだり悲しんだりしてくれる人」、「あなたの間違いや短所などについて率直に注意したり忠告したりしてくれる人」、「あなたの性格や行動などについて正直な意見や感想を述べてくれる人」、「あなたが悲しんでいる時やがっかりしている時などに、慰めたり励ましたりしてくれる人」、「他の人には話さないような事でも、あなたには隠さないで話してくれる人」及び「どのようなことでも、あなたの話をよく聞いてくれる人」となっている。簡単に言うと、(1)「私」の性格・行動・考え方を理解してくれて、正直な意見や率直な忠告を与えてくれる、(2)共に喜び、共に悲しみ、慰めや励ましを与えてくれ、相談相手になってくれる、(3)生き方・人生観等の話し相手、(4)気楽な相手、

そして(5)隠し事をしない人が望ましい友人であると女子青年は考えていることが理解できる。

一方、期待の低い項目は「何でもあなたの無理を聞いてくれる人」、「あなたの言うことには素直に従ってくれる人」、「あなたの意見や考えに対して、あまり反対しない人」、「あなたの性格や行動などについて、いつも良い方に解釈してくれる人」、「あなたの意見や考えが他の人と対立する時、いつもあなたの方に賛成し、味方してくれる人」、「いつもあなたに気を配って、何かと面倒を見てくれる人」、「あなたの考えや行動にあまり口を出したり、干渉したりしない人」、「真面目な話や難しい話はあまりしないで、いつも愉快地に遊ぶことのできる人」などである。概して、無批判的・同調的ないし服従的である関係や単に気楽で愉快なだけというのは友人として余り望ましくないとされていることが理解できる。特に、「私」の性格、行動、考え方等に対して無批判的で、同調一辺倒であったり無関心であったりという点が望ましくないものの中核をなすと考えられる。このことは自分の性格、行動、考え方等に対する率直な意見・感想あるいは注意・忠告が高い値を示しているのと表裏をなしている。

梅本(1977)の調査で、高校3年生の女子が高い期待を示したものの具体的な内容は、自分の性格や意見をよく理解してくれる人、自分で気付かない欠点や間違いについて率直に注意・忠告してくれる人、自分の性格やした事に対して、正直に意見・感想を述べてくれる人、気軽にお互いの性格や行動について話し合える人、自分に嬉しいことや悲しいことがある時に我が事のように喜んだり悲しんだりしてくれる人、困った事・悩み事がある時に気兼ねなく相談できる人、励ましてくれる人、これからの生き方や人生観などについて話し合える人、気軽に勉強・進学・就職について話し合える人、将来の目標や生き方などについて、しっかりした意見・感想を持っていて参考になる人、などである。また、自分にない長所・特性を持っている人、意見が異なる時に納得するまで議論し合え

る人、話した内容を他の人には喋らないので何でも安心して話せる人、将来の目標や趣味が同じなので、話をすると楽しくなる人なども高い値を示していた。ここでも良き理解者、性格・行動等についての意見・感想や注意・忠告、喜怒哀楽の共有、相談相手、将来の進路・生き方・人生観等についての話し相手といった内容が中心的期待をなしている。この調査と今回の調査とでは、質問項目の具体的内容や項目数、被験者などに関して、いくつかの相違点があるにもかかわらず、両者の結果はかなり類似している。このことから、主要な友人関係期待は比較的安定したものであると考えられる。

以上のことから、青年中期から後期の女子青年における友人関係期待の主なもの、「私」の性格・行動・考え方等に対して率直な意見・感想や忠告を与えてほしい、「私」の良き理解者であってほしい、喜怒哀楽を共にし、相談相手になり、励ましや慰めを与えてほしい、これから先の事や生き方・人生観等についての話し相手であってほしい、何でも話せる相手であってほしいといったものであることが理解できる。自己を把握し、自分なりの価値観を持ち、将来への展望を持つことが期待される青年期にあっては、自分の性格や考え方、将来の事や人生観について他者と自由にかつ率直に意見を交換し合うことは、自己を客観的・相対的に位置づけ、把握していく上で大きな意義を持つものである。それだけに、友人への期待として主要な位置を占めているのである。このことは、たとえ親密であったとしても、「私」の性格・行動・考え方にとただ同調一辺倒であったり、無批判ないし無関心であるということが低く評価されていることから確かめられる。前述した期待は希薄で表面的な関係によっては十分に満たされることの難しいものであり、どうしても自己の本音やプライバシーをさらけ出さざるを得ないこともあるものと考えられる。従って、相手が自分のプライバシーに関わってくることも避けられない性質のものである。そうした点から、女子青年は強い絆を持ち、深く内面に関わった関係を友人に求めていることが推測できる。ただし、こ

表・1 「友人への期待」並びに「友人」と「非友人」についての平均と標準偏差（上段：平均，下段：標準偏差）

No.	項 目 内 容	友人関係 期 待	友 人	非友人	t 検定
10	何か困った事や悩み事がある時に、あなたの相談相手になってくれる人	5.6 (0.89)	5.5 (1.39)	3.3 (1.39)	P<.001
4	これからの生き方や人生観などについて、真面目にあなたの話相手になってくれる人	5.5 (0.99)	5.4 (1.20)	3.1 (1.35)	P<.001
9	一緒にいる時、あなたがあまり気を使わなくてもすむ人	5.3 (1.32)	6.1 (1.01)	4.1 (1.56)	P<.001
15	あなたの性格や考え方を正しく理解してくれる人	5.3 (0.99)	5.6 (1.13)	3.9 (0.91)	P<.001
6	嬉しい時や悲しい時に、一緒になって喜んだり悲しんだりしてくれる人	5.3 (0.94)	5.8 (1.16)	3.9 (1.45)	P<.001
16	あなたの間違いや短所などについて、率真に注意したり忠告したりしてくれる人	5.2 (1.06)	5.0 (1.24)	3.3 (1.37)	P<.001
18	あなたの性格や行動などについて、正直な意見や感想を述べてくれる人	5.1 (1.06)	5.6 (1.09)	3.7 (1.20)	P<.001
25	あなたが悲しんでいる時やがっかりしている時などに、慰めたり励ましたりしてくれる人	5.0 (0.77)	5.8 (1.26)	4.2 (1.37)	P<.001
3	他の人には話さないような事でも、あなたには隠さないで話してくれる人	4.7 (0.95)	5.0 (1.44)	2.2 (1.26)	P<.001
27	どのようなことでも、あなたの話をよく聴いてくれる人	4.7 (0.78)	5.7 (1.26)	4.1 (1.36)	P<.001
28	何か分からないことや知りたいことがある時、親切に教えてくれる人	4.4 (0.68)	5.8 (1.21)	5.0 (1.24)	P<.01
8	あなたの好敵手や競争相手になってくれる人	4.4 (1.12)	4.7 (1.00)	3.5 (1.10)	P<.001
30	あなたのプライバシーにあまり深入りしない人	4.3 (0.73)	4.7 (1.66)	5.4 (1.28)	P<.01
11	あなたのプライドを傷つけるような事を言ったり、したりしない人	3.9 (0.85)	5.1 (1.39)	4.8 (1.28)	NS
21	どこかへ行く時や何かをする時に、いつもあなたを誘ってくれる人	3.8 (0.54)	5.1 (1.52)	2.6 (1.39)	P<.001
13	あなたの意見や考え方について共鳴し、賛同してくれる人	3.8 (0.62)	5.1 (1.12)	3.8 (1.05)	P<.001
17	あなたの特性や長所などを認め、高く評価してくれる人	3.8 (0.71)	4.8 (1.17)	3.5 (1.26)	P<.001
12	しばしば手紙や贈物のやり取りをしてくれる人	3.6 (0.89)	4.6 (1.84)	2.5 (1.53)	P<.001
22	いつもあなたをリードし、指導してくれる人	3.6 (1.01)	4.4 (1.30)	3.1 (1.39)	P<.001
14	あなたのことを頼りにしていて、何かにつけてあなたに相談したり、あなたの判断を求めたりする人	3.4 (1.12)	4.3 (1.41)	2.5 (1.24)	P<.001
1	あなたがどこかへ行く時や何かをする時、いつも一緒に行動してくれる人	3.4 (1.18)	5.1 (1.53)	2.2 (1.23)	P<.001
24	その人と付き合うと、何かと肩身が広がるような人	3.3 (1.01)	4.3 (1.69)	3.3 (1.27)	P<.001
19	真面目な話や難しい話はあまりしないで、いつも愉快地遊ぶことのできる人	3.3 (1.16)	4.9 (1.47)	4.3 (1.51)	P<.05
23	あなたの考えや行に、あまり口を出したり、干渉したりしない人	3.3 (0.97)	4.2 (1.42)	4.7 (1.37)	NS
20	いつもあなたに気を配って、何かと面倒を見てくれる人	3.2 (1.02)	4.5 (1.31)	3.1 (1.31)	P<.001
29	あなたの意見や考えが他の人と対立する時、いつもあなたの方に賛成し、味方してくれる人	3.1 (0.72)	4.4 (1.07)	3.7 (0.92)	P<.001
26	あなたの性格や行動などについて、いつも良い方に解釈してくれる人	2.7 (0.96)	4.2 (1.23)	3.6 (1.20)	P<.01
2	あなたの意見や考えに対して、あまり反対しない人	2.5 (0.74)	4.3 (1.16)	4.1 (1.14)	NS
7	あなたの言うことには素直に従ってくれる人	2.5 (0.83)	4.3 (1.38)	3.9 (1.06)	NS
5	何でもあなたの無理をきいてくれる人	2.3 (0.86)	3.7 (1.60)	2.9 (1.39)	P<.05

れまで挙げられてきた諸期待が青年期、特に青年中期・後期においてのみ認められるものと考えすることはできない。中学生においても喜怒哀楽の共有や相談相手、慰めや励まし、及び性格・行動に対する意見・忠告は期待として高い値を示している(梅本 1977)。総務庁の調査(1986)では、19歳から28歳の未婚の女性の74.2%、既婚者で65.0%が一番親しい友人に「悲しいとき話を聞いてほしい」と望んでおり、また未婚者、既婚者の大部分が友人を相談相手としている。さらに未婚者の50.1%、既婚者の42.5%が「お互いに悪いところは悪いといひあえる」と回答している。こうしたことから考えると、情緒的な支持とでもいいうる期待と性格・行動・考え方等への意見・忠告という期待は青年期中・後期のみ特有なものでなく、少なくとも青年前期からヤングアダルトまで幅広い年齢層で求められている期待であると推測できる。しかし同時に、これらの期待は年齢が増すにつれて挙げられる割合が減少する傾向が認められていることから、青年中・後期において特に顕著になる期待と言ってよい。

**\* 現実の友人について**

ソシオメトリックテストにおいて最初に名前を挙げられた「友人」と名前を挙げられなかった同級生の中から実験者がランダムに選択して被験者に組み合わせた「非友人」のそれぞれと

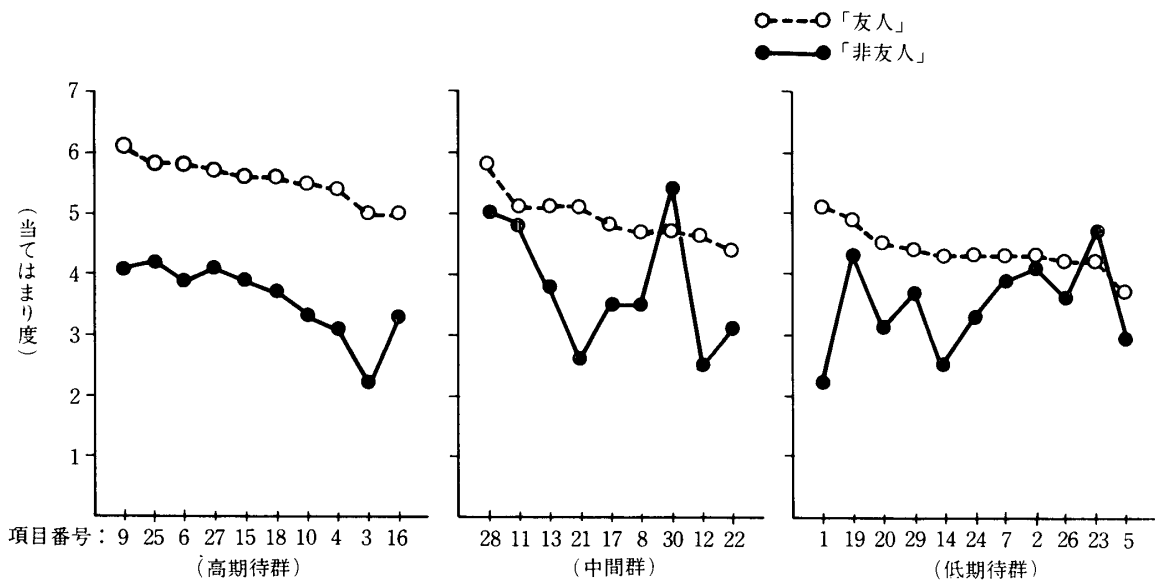
表・2 親交度についての平均と標準偏差  
(上段：平均 下段：標準偏差)

	友人	非友人	t検定
親交度	6.3 (0.758)	3.4 (1.412)	P<.001

どの程度親しくしているか(親交度)という質問に対する被験者の評定の平均と標準偏差は表・2に示してある。両者との親交度には有意差( $t=15.49, p<.001$ )がみられ、「非友人」とよりも「友人」と親しくしていることが確かめられた。

表・1には「友人」と「非友人」が友人関係期待にどの程度当てはまるか(当てはまり度)という質問に対する被験者の評定の平均と標準偏差が示してある。また、「友人」と「非友人」の当てはまり度についてのt検定の結果も併せて示してある。さらに、30項目を友人への期待が相対的に高い(評定の平均が4.5以上)項目群と低い(平均が3.5以下)項目群、並びに中間の項目群の3つに大別して、「友人」と「非友人」の当てはまり度を図示したものが図・1である(各群内の項目の並び方は「友人」の当てはまり度の高い順になっているので、表・1の並び方とは異なる)。

「友人」と「非友人」の当てはまり度に関しては、t検定の結果、30項目中26項目において有

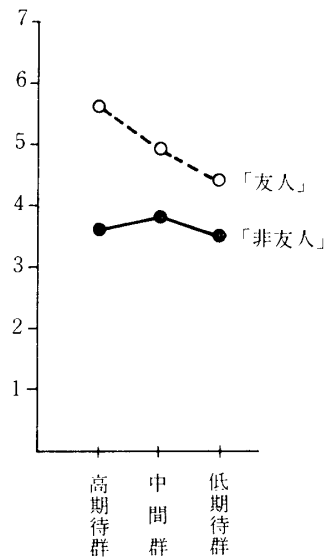


図・1 友人関係期待に対する当てはまり度の平均

意差が認められた(表・1を参照)。有意差が認められなかったものは「あなたのプライバシーにあまり深入りしない人」、「あなたの言うことには素直に従ってくれる人」、「あなたの意見や考えに対して、あまり反対しない人」及び「あなたの考えや行動に、あまり口を出したり、干渉したりしない人」の4つであり、いずれも友人関係期待は余り高くない項目である。有意差のあった26項目のうち、「非友人」の方が「友人」よりも高い当てはまり度を示したのは「あなたのプライバシーにあまり深入りしない人」のみであり、他は全て「友人」の方が高かった。次に、高期待群(10項目)、低期待群(11項目)及び中間群(9項目)のそれぞれに含まれる項目の当てはまり度の評定平均値を基礎データとして、各群毎の当てはまり度の平均を求め、図示したものが図・2である。分散分析の結果、友人関係期待の主効果と親交度の主効果、及び友人関係期待と親交度の交互作用が認められた(表・3を参照)。「非友人」に関しては、友人関係期待の高・中・低それぞれの間で、当てはまり度に有意差が認められなかったのに対して、「友人」においては、高期待群の方が中間群よりも当てはまり度が有意に高く( $t=3.606, p<.01$ ),また中間群の方が低期待群よりも有意に高かった( $t=3.098, p<.01$ )。さらに、「友人」について各項目別にみると、高期待群の10項目はすべて当てはまり度が高くなっているのに対して、中間群では9項目中4項目、低期待群では11項目中わずか1項目のみが高い当てはまり度を示しているにすぎない。これらのことから、(1)友人関係期待の高低にかかわらず、「友人」の方が「非友人」よりも期待への当てはまり度が全般に高く、(2)「友人」の当てはまり

度は期待の高い項目群において高く、以下中間群、低期待群となるにつれて低くなっていることが理解できる。即ち、親しくしている「友人」はそうでない人よりも友人関係期待によくかなった人であると認識されているのである。

「友人」への当てはまり度を項目ごとにみると、表・1から明らかなように、半数の15項目で評定の平均が5.0以上となっている。特に「一緒にいる時、あなたがあまり気を使わなくてもすむ人」、「あなたが悲しんでいる時やがっかりしている時などに、慰めたり励ましたりしてくれる人」、「嬉しい時や悲しい時に、一緒になって喜んだり悲しんだりしてくれる人」、「何か分からないことや知りたいことがある時、親切に教えてくれる人」、「どのようなことでも、あなたの話をよく聞いてくれる人」、「あなたの性格や考えなどを正しく理解してくれる人」、「あなたの性格や行動などについて、正直な意見や感想を述べてくれる人」、「何か困った事や悩み



図・2 高・中・低期待群毎の当てはまり度の平均

表・3 当てはまり度についての分散分析表(友人関係期待×親交度)

変 動 因	SS	df	MS	F	
友人関係期待(高中低)	0.4201	2	0.210	5.724	P<.01
親交度(友人/非友人)	2.6534	1	2.6534	72.3	P<.01
交 互 作 用	0.9133	2	0.4567	12.444	P<.01
誤 差	1.9817	54	0.0367		



事があるときに、あなたの相談相手になってくれる人」、「これからの生き方や人生観などについて真面目にあなたの話し相手になってくれる人」などの当てはまり度が高い。この他に「他の人には話さないような事でも、あなたには隠さないで話してくれる人」、「あなたの間違いや短所などについて、率直に注意したり忠告したりしてくれる人」、「あなたのプライドを傷つけるような事を言ったり、したりしない人」、「あなたの意見や考え方について共鳴し、賛同してくれる人」、「どこかへ行く時や何かをする時に、いつもあなたを誘ってくれる人」、「あなたがどこかへ行く時や何かをする時、いつも一緒に行動してくれる人」も高い値を示している。これらの内容から考えて、女子青年においては友人が大きな依りどころになっており、重要な役割を担っていることは確かである。

友人関係期待としては高い値を示しているわけではないが、当てはまり度の平均が5.0以上になっている項目がいくつかあるので(図・1を参照)、この点について少し検討してみる。第一に、行動・活動を共にすることは、年齢とともに、友人関係にかかわる要因としての重要性を減少させていく傾向があるが(Bigelow 1977; 田中 1975)、勿論このことは友人関係において行動を共にすることが減少することを意味するものではない。実際の友人関係において、一緒になる機会が多いことは親しくなるための基本的要因であるし、親しい友人同士になれば、親しい故に共に行動する機会が増加するのは自然なことである。従って、友人関係期待として挙げられることは減少しても、親しい友人関係の基礎的要因であることに関しては、児童期・青年期を通して不変である(Sharabany et al 1981)。本研究のように、「友人」が被験者と同じ学校、同じクラスに所属している場合は猶さらである。その意味で、「どこかへ行く時や何かをする時に、いつもあなたを誘ってくれる人」や「あなたがどこかへ行く時や何かをする時に、いつも一緒に行動してくれる人」が友人関係期待としては低く評価されているにもかかわらず、現実の「友人」では当てはまり度が高くなって

いることは当然であろう。同様に、「あなたのプライドを傷つけるような事を言ったり、したりしない人」が友人関係期待として高い位置づけを与えられていないにしても、自己のプライドを傷つけられることは決して喜ばしい事ではないだろう。そのような言動を示す人は友人として望ましい人とは言えない。それ故、「友人」がそのような言動を示さない人であるのも当然と思われる。最後に、「あなたの意見や考え方について共鳴し、賛同してくれる人」については、プライドを傷つけることと逆の事が考えられる。

「非友人」についてみると、評定の平均が5.0以上の項目は「あなたのプライバシーに余り深入りしない人」、「何か分からないことや知りたいことがある時、親切に教えてくれる人」の2つに過ぎない。その他に「あなたのプライドを傷つけるような事を言ったり、したりしない人」、「あなたの考えや行動に、あまり口を出したり、干渉したりしない人」もやや当てはまり度が高くなっている。

以上の検討から、青年の置かれている心理・社会的状況より派生してくると予想される友人への期待が、実際に、青年によって高い位置づけを与えられていることが確かめられた。また、そうした期待が親しい友人によって実現されていることが理解できた。このことから、改めて、青年期において果たす友人の役割ないし意義といったものがどんなものであるのかが把握できる。即ち、行動を共にすることが多く、遠慮せず何でも気軽に話し合える関係を基礎にして、友人は「外」からの視点ないし他者に映った自己像といったものを提供し、時に批判者となって自己の修正を促し、時に支持者となって自己の妥当性を高めてくれる源であるとともに、大きな情緒的支柱ともなっている存在である。そして、こうしたことを通して、自分が他者によって理解されているという青年の確信を高め、精神的安定を強化する源ともなっていると考えることができる。

#### (4) 要 約

女子短大生を対象に青年期における友人関係

期待について調査した結果、「私」の性格・行動・考え方などに対して正直な意見・感想や率直な注意・忠告を与えてくれる人、「私」の良き理解者である人、喜怒哀楽を共にし、相談相手になり、励ましや慰めを与えてくれる人、これからの生き方や人生観などについて話し合える人、気を使わなくてもすむ人などが女子青年の抱く主要な期待であることが把握された。また、現在親しくしている友人はこれらの期待によく当てはまる人であると認識されていることが確かめられた。

### 引用文献

- (1) 安藤延男(1966) 青年期における準拠集団の推移 心理学研究 Vol. 37, No. 4, 219-229
- (2) Ausbel, D.P. (1954). Theory and problems of adolescent development, Grune & Stratton
- (3) Argyle, M. (辻正三, 中村陽吉訳) (1972) 対人行動の心理学 誠信書房
- (4) Bigelow, B.J. (1977). Children's Friendship Expectations: A Cognitive-developmental Study, Child Development, 48, 246-253
- (5) Bigelow, B.J., and LaGaipa, J.J. (1980). The Development of Friendship Value and Choice. In Foot, H.C., Chapman, A.J., & Smith, J.R (ed) Friendship and Social Relations in Childre, John Wiley & Sons
- (6) Douvan, E and Adelson, J. (1966). The Adolescent Experience, John Wiley & Sons
- (7) Erikson, E.H. (小此木啓吾訳編) (1973) 自我同一性 誠信書房
- (8) Furman, W., and Bieman, K.L. (1984). Children's Conceptions of Friendship: A Multmethod Study of Developmental Changes, Developmental Psychology, Vol. 20, No. 5, 925-931
- (9) 加藤隆勝 (1964) 青年期—その心理と思想 誠信書房
- (10) 加藤隆勝 (1977) 青年期における自己意識の構造「心理学モノグラフ No. 14」(日本心理学会) 東京大学出版会
- (11) 楠見幸子 (1986) 友人概念の発達の研究—中学生と大学生の友人概念構造の比較—日本教育心理学会第 28 回総会発表論文集 478-479
- (12) LaGaipa, J.J. (1979). A developmental study of the meaning of friendship in adolescence, Journal of Adolescence, 2, 201-213
- (13) 宮川知彰 (1966) 青年の性と結婚 大日本図書
- (14) 中野目直明 (1971) 現代の高校生—その生活と意識—日本放送出版協会
- (15) NHK 世論調査部編 (1986) 日本の若者—その意識と行動—日本放送出版協会
- (16) 西平直喜 (1965) 友情・恋愛 大日本図書
- (17) 小此木啓吾 (1984) 現代青年への視覚—精神分析学的青年論—青年心理 No. 43, 156-176
- (18) Piaget, J., and Inhelder, B. (波多野完治 須賀哲夫, 周郷博共訳) (1969) 新しい児童心理学 白水社
- (19) Reisman, J.M., and Shorr, S.I. (1978). Friendship Claim and Expectation among Children and Adult, Child Development, 49, 913-916
- (20) Sharabany, R., Gershoni, R., and Hofman, J.E. (1981). Girlfriend, Boyfriend: Age and Sex Defferences in Intimate Friendship, Developmental Psychology, Vol. 17, No. 6, 800-808
- (21) 総務庁青少年対策本部編 (1986) 現代青年の生活と価値観—「現代青年の生活志向に関する研究調査」報告書—大蔵省印刷局
- (22) 総理府青少年対策本部編 (1981) 10 年前との比較からみた現代の青少年—青少年の連帯感などに関する調査報告書—大蔵省印刷局
- (23) 平良洋子 (1987) 児童用友人関係概念測定尺度の作成 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集 302-303
- (24) 田中熊次郎 (1975) 新訂児童集団心理学 明治図書
- (25) Thibaut, J.W, and Kelley, H.H. (1959). The Social Psychology of Group, John Wiley & Sons
- (26) 梅本信章 (1977) 女子中学生と高校生の友人に対する役割期待について 日本教育心理学会第 19 回総会発表論文集 466-467
- (27) 梅本信章 (1978) 男子中学生・高校生の友人への期待 日本教育心理学会第 20 回総会発表論文集 438-439
- (28) 依田 新 (1963) 青年心理学 培風館
- (29) 吉田 昇, 門脇厚司, 児島和人編 (1978) 現代青年の意識と行動 日本放送出版協会